

遠からん者は音に聞け

作詞：不詳

1. 遠からん者は音に聞け

近くは寄りて目にも見よ

これぞわれらが腕の意気

千万の敵何かある

ツララ大中(高)大中(高)

ツララ ツララ

ツララ大中(高)大中(高)ツララ

「遠からん者は・・・」の対句となっている
最初の2行は武士が戦場において行なった
礼儀の「名乗り」の形式のはじめによく用いられる
「平家物語」等に似たものが度々でてくる
音に聞く・・・評判に聞く、伝え聞く

何かある：反語表現、何ほどのことがあろうか
(何ほどのこともない)

2. 秋繚乱りょうらんの血にしきの錦

ちぐさ
千草の中に北見れば

どとう
怒濤逆巻く太平洋

南島嵐いや強し

ツララ大中(高)大中(高)

ツララ ツララ

ツララ大中(高)大中(高)ツララ

繚乱：入り乱れること、特に花が咲き乱れること。
散り乱れること

千草：いろいろの草(多くの若者?)

2番1, 2行は安陵学園の様子を表したものと
考えたい

怒濤：荒れ狂う大波

弥(いや)：いよいよ、ますます、弥が上に

※大中数え歌の作者の石田 揆はかる氏(大中9回卒)から、30年前に
吉見憲治(大高4回卒)への書簡の中で、「千草の中に北見れば」が正しいとの
指摘がある。